

玉川学園と Bundes・スキーアカデミーとの関係の再構築

大澤誕也 小林潤 宮崎純子 河野峻平 松原優香

玉川学園・玉川大学
健康・スポーツ科学研究紀要
第 17 号

玉川学園とブンデス・スキーアカデミーとの関係の再構築

—玉川学園におけるスキー教育の在り方—

大澤誕也*¹ 小林潤*¹ 宮崎純子*¹ 河野峻平*² 松原優香*²

はじめに

1930年に玉川学園創立者小原國芳がハンネス・シュナイダー氏を本学に招聘したことから始まった玉川学園とオーストリア・スキーとの関係も、2020年には90周年を迎える。シュナイダーの来日がなければ、国内で2回の開催をみた冬季オリンピックの実現も含め、現在の日本スキー界の発展はなかったと言われるほど価値のある歴史を玉川学園は有している。しかし、玉川学園・玉川大学との共同研究などを通して長きにわたり親交の深かったオーストリアのスキーアカデミーのヴェルナー・ヴェルンドレ校長が昨年退官された。また、定期的に行われていた、オーストリア国家検定員によるスキー学校指導もK-12の体制になってからは行えていない。このような状況の中、玉川学園におけるスキー教育の原点を再検証し、本学にスキーを媒体として教育実践に多大なる影響をもたらしたオーストリア・スキーアカデミーとの良き関係を再構築する時期に来たと考える。

そこで、全人教育における「健」の価値を担う健康教育において中核の一つである、オーストリア・スキーに関する知識の深化を図る貴重な機会とし、ブンデス・スキーアカデミーとより一層密接な関係を再構築し、今後の玉川スキー教育の継続的な発展を促進することを主たる目的としてオーストリアで研修を実施した。

玉川学園とスキーの歴史に関して、オーストリア研修の活動報告、研修参加者による研究報告、そして最後に玉川学園スキー教育の展望に関して報告する。

1. 玉川学園とスキーの繋がり

ホントの教育を目指し、真剣にマコトの教育を行うことを目指し、玉川教育は小原國芳によって1929年(昭和4年)にスタートした。ホントの教育とは、入試準備のための教育ではなく、更には創造と工夫と発明を忘れた、暗記、詰め込み式、出世主義、打算主義ではない。「全人教育」における「信・善・美・聖・健・富」の六つの価値をコスモスの花のように美しく調和的に育てることこそ、最も重要なのだと考えたのである。

そして、小原國芳は、これらの価値を調和的に育てるべく、様々な取り組みを行ってきた。今回はその中でも、全人教育の「健」の価値における取り組

みについて、歴史的背景をもとに考察したいと考える。

玉川学園では創立以来大切にしてきた「健」における財産として、「スキー」と「基本体操」という二つの輝かしい歴史を有している。「スキー」はスキー学校やスキー研究、スキー部の活動として、「デンマーク体操」は全ての運動の根幹として、今も玉川学園では大切にしている。これらの財産は、永続的に大切にしなければならぬものであり、磨き続け、発信し続けるべきものだと考える。そして、それぞれの歴史的背景や経緯など改めて掘り起こすことが、今後の健康教育の発展につながると考え、「健」の価値、そして、まずは「スキー」に焦点を

*¹ 中学年 *² 低学年

当てていきたい。

玉川学園創立者小原國芳は鹿児島県河辺郡防津町久志（現在の南さつま市坊津町久志）生まれで雪とは無縁の生活であった。

大正 15 年 1926 年。日曜も祭日もなく、春夏冬の休暇は無論のこと、土曜の午後から日曜、祭日。全く引っぱり風で、日本中、南船北馬の講演旅行は年に二万里以上であった。そんな大忙しな小原先生を見兼ねた二人の義弟は、スキーに出かけないかと誘ったのであった。

「新年早々、仕事もないでしょう。少しは休まないで長生きしませぬよ。いい考えも生まれませぬよ。ハタもタマリませぬよ」と。姉とも相談の結果らしいです。「いやだ、一日、休めば、一日、仕事がタマる。それだけ苦しいだろう。損するだろう。仕事はオレの恋人なんだ」がスキー帽も、クツ下も、厚いセーターも、手袋もそろえとる。「僕たちのためにも出かけてくれませんか」と、嘆願の姿にかわる。そうすると、私は負けイクサです。いささか、サツマ流の冒険心も手伝い、物珍しい好奇心も湧いて、賛成。上野発。夜行。行く先は福島県の沼尻。目がさめると川桁駅！凄い吹雪！オーケストラそのままの乱舞の花ビラ。窓ガラスへの吹きつけ。否なタタキつけ。ピューピューとスゴい音さえ伴って。森も電柱も煙突も、家々も雪と戦つとる。「これだ、これ！これに東京の子供たちをブツつけて鍛えてやるんだ」

（『全人教育』昭和 38 年 2 月号）

これが、小原國芳と、スキーとの最初の出会だった。そして 3 日間を過ごしたのち、早速二月には学校全部をあげてスキーに連れていくほど、スキーに夢中になったのであった。おそらくこれが日本で最初に行われたスキー学校であった。そして 1930 年（昭和 5 年）田口のスキー場での子供たちと小原國芳との会話が、日本スキー界を大きく揺るがす、そして、進展させていく一つのきっかけとなったのであった。

午前のスキーをすまして、おフロを浴びて、おこたに入っていると、「先生。同じ習うなら、世界一に教わりたいなア」と、斎藤少年がねだる。「世界一」と言われると私の気持ちはたまらん。「世界一

って、だあれ？」「先生知らないの？オーストリア、サンクト・アントンのハンネス・シュナイダーですよ。」「そうか、それじゃ呼んであげよう」「ホント？」「ウアー、いいなあ」「ステキ！」とみんなが大喜び。子供らに喜んでもらえることが、万事、私の教育推進力なのです。「世界一を」ということは、全く私にとっては偉大な教育力であり、力強い魅惑なのです。

若い頃、日露戦争を中心に、五ヶ年間、海底電信の技師だった私。おコタの中で早速・・・Hannes Schneider Sankt Anton Austria・・・と書き出した。

（『全人教育』昭和 46 年 3 月号）

ここでの、小原國芳と生徒たちの子弟間の温情溢れるエピソードは、様々な出版物の中で記されているが、その都度話している少年の名前が変わっている。時に、松田智雄や山口一考、上記に書かれている斎藤由理男などが挙げられていたが、昭和 9 年に旧制玉川学園中学を卒業した小池太郎であることが分かった。

ハンネス・シュナイダーの招聘にあたって、三週間の滞在のために当時のお金で一万円、現在のお金に換算すると一千万円に相当する大金を用意しなくてはならなかったことに関して、小原國芳は、お金を工面するために関係各所に掛け合い、なんとか翌日までには用意することができたものの、大変な借金が残ってしまうのであった。そして困難はこれだけでは収まらず、ハンネス・シュナイダーの招聘に対して、日本のスキー連盟の幹部が自分たちに話を通さなかったことに怒り、招聘に反対したのであった。「なぜ無断で招待したか」となかなか協調せず、これに関しても納得するまで大変骨の折れる作業であった。

しかし、紆余曲折はあったものの、昭和 5 年 3 月 15 日（土）ハンネス・シュナイダーを東京に迎えることができたのである。

小原國芳はスキーに関しての思いを次のように述べている。「吹雪です。銀世界です。空林枯木、一朝にして花咲き、玉楼銀台にして成る天然のフシギさ！そして、山です山。峩々たる力強い雪の山。荘厳そのもの、神秘そのもの。全く大宗教です。大

道徳です。心のミソギです。スキー大学の夢は何十年前からでした。漸く、その時期が来ましたか！どこにしようか。蔵王か、五色か、沼尻か、田口か、白馬か、八方か。ゼヒ、子たちに、ドコか土地を求めて、雪小屋を造ってやりたいのです。若き日、あの崇高さに、あの清純さに、せめて三日間でも接せしめたいものです。若き日にです。若き日に。そして精神鍛錬に身体鍛錬。」とスキーへの強い思い訴え、大自然の尊さを子供たちに肌で感じてもらいたいと考えたのであった。更にはその思いは、雪小屋を作ってあげたいと思うほど燃え上がるものでした。そして、「いはんや、あの壮快な、いはんや皚々たる銀世界の中で、更に壮絶なる吹雪の中での痛快さは、實に少年にとって、こよなきスポーツだと信ずる。」と付け加えている。また、「この意味からも、スキーの如きは實にどんなヘタでも、一人でも楽しめる所に長所があると思ふ。無論、どんなに多くてもやれるし。」と語っている。後の小原哲郎も「私がスキーに情熱を傾けるのは、雪の清浄さ、その無垢な偉力への憧れからである。老木枯草一朝にして華咲き、陋屋曠土瞬時にして白衣を纏わしめるこの雪の上に立って、その銀雪の精に触れつつ、老いも若きも上手も下手も、楽しく迂り得る清いスポーツをこよなく愛するからだ。」と追記している。これらの文章から、小原國芳のスキーへの思い、そして歴代の先生方の思いが十分受け止められる。

小原國芳は世界を追い求めた結果、シュナイダー氏を招聘することになったのだが、シュナイダー氏も同様に「シュナイダー氏のスキーは他の煩瑣なるスキー術と趣を異にしている所に吾々の学風と面白い共通点が存在する。眞の精神を体得しさえすれば百の方法は自ら生まれてくるというのが氏の主張である。」「氏のスキー道はまた、体験を生命とされることである。吾々の学校が、体験、実証、証得、労作、自学、自律、個性、自由ということを尊重するのとまた一致していることはうれしい。」と言っている。

シュナイダー氏が日本に滞在したのは40日間、この間で菅平高原、野沢温泉、妙高高原、青森県、北海道など合計6カ所のスキー場を訪れ、また、全国15カ所、20回の公演を行った。在日の間、映画

と講演、雪上での実技指導は、当時、生の情報に乏しかった日本のスキーヤーに決定的な影響を及ぼすこととなった。日本のスキーヤーはシュナイダーが提唱した、アールベルグスキー術がシュテム技術を中心とする技術体系であることを知り、ホッケ姿勢、プルークボーゲン姿勢の習得が全てのスキーヤーの目標となった。また上級者に至っては、シュテム・クリスチャニア、パラレル・クリスチャニアの技術習得に全力を注ぎ、アールベルグスキー術が、当時のスキー界を風靡することとなった。

後にシュナイダー氏は日本での出来事をこのように語っている。「親愛なる全日本のスキー家達、私は心から皆様に向かってご挨拶を申し上げます。長途の旅を了えて、私のかつて受けたことのない熱烈なる出迎えを皆様から受けましたことは思い出すだけに感謝の外ありません。手に手にオーストリア旗をかざして歓喜に満ちた皆様、實に終生私の忘れ得ざるところで御座います。ここに改めて日本のスキー家達東京市民並に玉川学園生徒諸君に対し、心から感謝の意を表明致す次第であります。」と日本への来朝が、シュナイダー氏にとっても大きなものであったことが伺える。このように、シュナイダー氏が日本スキー界に残した功績は大きく、後の二回のオリンピックは、シュナイダー氏の招聘なくして実現しなかったと言われている所以である。

このようにして始まった、玉川とスキー、また、玉川とオーストリアスキーとの関係は、その後も様々な媒体を通して繋がっていった。シュナイダー氏の来朝の翌年には小原國芳夫婦で真冬の二月に、サンクト・アントンのシュナイダー氏の所を訪れた。その後1962年昭和37年には、世界のスキー連盟長であり、オーストリア国立スキー訓練所長、またウィーン大学の教授でもあり、“現代オーストリア・スキーの父”といわれるシュテファン・クルッケンハウザー氏を招聘することも実現した。また、招聘を記念して玉川大学は「シー・ハイル」の発行も行い、スキー界の絶賛を博した。クルッケンハウザー氏は各方面からの招聘にも応じず、大学ならばということで応じた。大先輩のシュナイダー氏を吾々が32年前に呼んだということもあり、また小原哲郎夫婦もヨーロッパ留学中に2度も教授にスキ

一を教わるといふ繋がりから、夫婦と高弟達3人を連れてきた。滞在中は様々な式典に参加し、玉川大学名誉教授も喜んで受け入れ、皇太子殿下との謁見も実現した。この謁見では、予定時間を1時間半も超過するほどの熱の入ったものとなった。またシュナイダー像の除幕式も行い、オーストリアスキーとの絆の象徴となった。

クルッケンハウザー氏のスキーへの功績は数多く残されているが、その中でも一番大きなものとして、やはり「オーストリアスキー教程」が挙げられる。ライカカメラの使い手としても名高い人物であり、教程の中に写っている写真も彼自身が撮影したものが多し。オーストリアにとってスキーは国を挙げてのスポーツであり、産業でもある。1930年代からのオーストリアとフランスの競争は激しいものがあつた。先ずはオリンピックや世界選手権のアルペン種目でお互いに勝たなければならない運命に置かれ、どちらかの国の選手が金メダルを取れば、その選手の履いているスキーが世界中で大ヒットするという仕組みになっていた。また大会で成績を挙げた選手の滑りは各国で総力をあげて分析され、理屈づけられ、やがてはスキーを学ぶものへ体系付けられた。オーストリアは正にこのことを国全体が一丸となつて行つてきたと言えるだろう。クルッケンハウザーはその中心的なオーストリアスキー指導者の総帥だったのである。そんな氏を、玉川学園では1962年・1972年・1976年と幾度となく招聘し、玉川学園スキー学校では中学から大学までの500名余りの生徒・学生に対して指導を行つた。また各地では講演・講習を行い、日本スキー界に大きな影響を及ぼした。

その後も、ブンデススキー学校の校長を務めた、フランツ・ホピヒラー教授、ヴェルナー・ヴェルンドレ教授とも交流を続け、玉川学園が世界で初めて作成した、スキー指導システムを納めたCD-ROM「スキーサポートシステム」において、ブンデススキーアカデミーが全面的に協力したのである。

1990年には「ハルネス・シュナイダー生誕100年・来日60年記念祭」が行われ、名誉会長に三笠宮寛仁親王殿下、組織委員会会長として小原哲郎、実行委員長として橋本道、委員としても永井三千昭

が担当し、玉川学園が中心となつて式典が行われた。

以上のように、玉川学園とスキーの関わりは深く、オーストリアスキーとの関わり、シュナイダーの招聘が、日本スキーの発展に大きく影響を及ぼした。また、スキー学校を創立以来実施し続け、スキーの研究も並行して行つたのである。

2. オーストリア研修活動報告

<2016年3月19日(1日目)>

目的地サンクリストフにある、スキーアカデミーに到着



Ski Austria Academyの外観

<2016年3月20日(2日目)>

・スキー講習

レンタルショップは、宿舎近くにも多数あり、私たちが行つたショップは素晴らしい品揃えで、様々な用途に合わせて、スキーの種類を選ぶこともできた。

研修は、オーストリア国家検定員の資格を取得しているMartin氏が1日担当してくれた。彼は水曜日に行われる、スキーショーにも出るようなスキー教師である。

足慣らしを目的に、ポジションを確認しながら滑つたのだが、改めてスキー場の広大さに驚き、大自然の中で滑る楽しさを感じさせてくれた。そして何より驚いたのが、一度に滑り降りる距離である。日本での講習であれば、数100m滑ればすぐに止まるという繰り返しだが、オーストリアでは、目的地を伝え後は、ほぼノンストップで下まで滑り降りる。この滑走距離は具体的には測ることはできなかったが、

午前、午後の2時間の講習で1年分は滑ったと感ずるくらいの滑走距離であった。4時間近くのレッスンの中で、ポジション以外の指示はほとんどされてない。もちろん足慣らしが目的であったからだとは思うが、日本のレッスンに慣れていると教わらないことに対し不安を抱くこともあった。しかし、ゲレンデのどこを見渡しても、レッスンらしいことをしている集団は少なく、何かスキーに対する考えが違いうように感じられた。このことはキッズスキーも同様にスクールのようなものは行われているが、コーチは転倒したこどもの補助をしているだけで、とにかく滑って、身体で覚えるといった様子であった。スキー場は標高が1800m以上あるため木が少なく、リフトで頂上まで上がれば、どこからでも滑り降りることができるようになっている。その中でも赤、青、黒でコースにレベルを表示し、また危険なところには表示も置かれていた。しかし自然の楽しみ方は人それぞれで、滑走路を日本のように限定はしておらず、全ては自己責任で楽しむように設定されていた。



ゲレンデの様子



9名乗りのリフト

リフトに関しては、Tバーやクワッドリフト、9名が横に並んで一度に上がる大きなリフトもあった。またゴンドラにも様々な大きさがあり、大変効率良く稼働していた。しかし日曜日ということもあり、客が多く、最近日本では体験していないリフト待ちがあった。またゲレンデマップも電光掲示板になっており、常にゲレンデの最新情報が提示され必要な情報をすぐに手に入れることができた。

山頂やゲレンデの途中には、いくつもレストランがあり、大勢がそこで思い思いに楽しい時間を過ごしていた。ベンチに寝そべり日光浴をする者、仲間

と楽しそうに酒を酌み交わす者、食事というよりはビールやワインを飲んでいる人が多いように感じた。それぞれのレストランには陽気な音楽が流れ、スキーと同じように、雪山での一つの楽しみといった様子であった。日本のようにお酒を飲んでのスキーは危険だといった様子は一切なかった。これはそもそも文化が違うように感じられた。

<2016年3月21日(3日目)>

- ・スキー講習(バルーガ・サンアントン)
- ・講義①「スキー場の安全管理」

Sebastian Brotzner 氏

午前中の講習では、アールベルグ地方サンアントンで一番標高の高いバルーガにゴンドラ2本を乗り継いで向かった。そこでの風景は、小原國芳先生が1926年の福島県の沼尻のスキー場で感じた、「山々の神々しさ」と重なる感覚であったと思う。決して人間では作り得ない、この自然の雄大さを肌で感じ、何か込み上げてくるものがあつた。



バルーガの山頂からの景色

その後の講習では、やはり昨日と同じでとにかく長い距離を滑るといった講習であった。その中でもポイントとしては下記のようなことを重点に行った。

- ・ 抜重をし、しっかりフォールラインに向かうこと。アルペン姿勢をとり、内倒しすぎず、上半身で抑えすぎないように、スタンスは腰幅がベスト。コブや不整地ではスタンスを狭くする。
- ・ ストックを上に向け谷側に擦るようにして滑る。
- ・ 両手を片方の膝に押し当てて滑る。
- ・ 両腕を組んでショートターン

午後はゲレンデ内のアトラクションに入った。タイム計測ができるバーンや、パークが作られ、ジャンプをするなど様々なスキーを通した遊びを行うことができた。

ゲレンデの大きさが日本と異なり、大きいから作れるのかもしれないが、スキーの楽しみ方も日本に比べ多いように感じた。

<2016年3月22日(4日目)>

- ・スキー講習
- ・シュトゥーベンのシュナイダーの生家へ
- ・講義②「オーストリアスキーの歴史」

Herbert Mandl 氏

シュナイダー生誕の地、シュトゥーベンに行った。シュトゥーベンは小さく趣のある町であった。そこにはシュナイダーの銅像があり、今は他の人が住んでいるがシュナイダーの生家にも訪れることができた。



シュナイダー像 シュナイダーの生家

講習の内容は下記のものである。

- ・シュテムターンの練習
- ・コブの急斜面でロングターンの練習を行った。
- ・抜重をターンの中に取り入れる。
- ・手を腰に当て、指差しターン
- ・両手を腰に当てたまのターン
- ・ストックをももに押し当てながらターンをする。
- ・不整地(コブ)の滑り方。

オーストリアに来て講習3日目になるが、日本では考えられないくらい速いスピードで滑っていることに気が付いた。周囲のスキーヤーのスピードも当然速く、それは子供から大人まで桁違いに早いので

ある。日本では危険だと思われるようなスピードでも、コントロールしながら滑っているのである。これはゲレンデ幅の関係や斜度、スキーヤー同士の衝突の危険が少ない事なども関係すると思う。そして何よりも、日本ではスキー板の真っ直ぐ滑りたい意志に対して、人が板を操作し、邪魔しようとするのに対して、オーストリアでは、板の意志のまま人と板が喧嘩することなく滑ることができているのである。このことにはしっかりと根拠があり、日本のゲレンデのように板を操作し続けていては、オーストリアのゲレンデでは下まで体力が続かないのである。このような理由から、私たちは自然と楽な位置にポジションをし、効率的な滑り方となっていたのである。結果、スピードも出ていたという事に繋がる。

このような環境で育った選手に日本のスキーヤーがなかなか勝てないのにも納得させられた。

<2016年3月23日(5日目)>

- ・インスブルック観光
- ・アンブラス城
- ・スキージャンプ台
- ・サンアントン観光
- ・スキー博物館
- ・スキーショーの見学

サンアントンにあるスキー博物館では、感動的な出来事があった。それはシュナイダーを取り上げた展示が多数あったことである。シュナイダーを紹介する動画の中には、日本へ行った経緯などが多く話されていた。あれだけの著名な人物が、短い映像の中で日本の話をするという事は、彼に取っても印象深い旅であったことが分かる。またその中の会話では、日本には全く興味を持っておらず、行きたくなかったが、妻や周囲の強い勧めがあり実現したという新証言もあり、このことは私たちにとっても大きな発見であった。そして何よりも、研修メンバー全員が思わず歓喜の声を上げたのは、遠いオーストリアの地で、創立当時の玉川学園の映像が流れ、小原國芳先生とハンネス・シュナイダーが玉川学園前駅で握手を交わしている映像が流れたときである。そしてその後も、玉川学園の様子、日本での様々

な講習の様子が長く映し出されたのには驚きと共に感動させられた。博物館全体は小さなものだったが、スキーの歴史、そしてサンアントンのスキーの歴史がわかる場所であった。

そして 21:00 から行われるスキーショーを観に、スキースタジアムに行った。大人から子供までが楽しめるショーとなっていて、やはりスキーが現地の人にとって文化そのものであるということを改めて感じさせてくれた。昔の格好をしてスキーの歴史を伝える内容であったり、スキーだけでなく、スノースポーツとして捉えていたりする構成となっていた。またジャンプやたいまつ滑走などもあり観客を大いに沸かせた。最後の方では、圧雪車を動かしての発表もあり、雪山に関わる幅広い内容のショーとなっていた。寒い中でのショーではあったが、大いに盛り上がり、海外のエンターテイメントの質の高さを感じた。



スキースタジアムでのスキーショー

<2016年3月24日(6日目)>

- ・スキー講習(レッシェ)
- ・郷土博物館見学
- ・講義③「オーストリアスキー教程」

Andreas Holler氏

スキー講習を行ったレッシェは、オランダ王家、スウェーデン王家、英国王室御用達であり、高尚さ、優雅さにかけては比類ない場所である。高級なホテルが立ち並び、雰囲気も良く、街を行き交う人も生活層の高い人と見受けられた。レストランでは、スキーウェアで入るには、少し抵抗があるような、高級レストランであったが、周囲を見渡しても、スキー

ヤーばかりで、更には子供たちも沢山食事をとっていた。オーストリアでは、スキー指導者は4人以上のグループで入店すると昼食代はかからないようである。このようなルールがあることもスキー大国のオーストリアならではの感覚だ感じた。

またスキー場に隣接しているスキー博物館に行き、昔の人がいかにしてこの寒さを乗り切って生活していたか、オーストリア人がどれだけスキーを生活の一部としてとらえていたかなどを学ぶことができた。当然、シュナイダーに関しての資料もあり、改めてシュナイダーがオーストリアで英雄であったかが理解できた。

この日の講習では、最大傾斜の36度に挑戦した。1972年札幌冬季オリンピックのスキージャンプ場として使われた「大倉山ジャンプ競技場」でも、アプローチの傾斜は35度である。僅かではあるが、それよりも急な斜面を私達グループは難なく滑り降りることができた。もちろんゲレンデが広く開放的なため、あまり急に感じなかったのかもしれない。この数日の講習の中で、何度も急な斜面を滑走していたため、感覚が麻痺していたのかもしれない。どちらにせよ、私達グループはこの経験でスキー技術に関して、大きな自信を得たことは確かである。

そして、「音」についての気付きもあった。私たちの普段住んでいる場所や、生活している時は、常に何かしらの音が聞こえてくる。しかし、オーストリアに来て、この大自然の中に入り込んだ時、そこには別世界があった。止まっていると、そこには恐ろしいくらいの「無音」の世界が存在していたのである。耳が聞こえなくなったのかと一瞬勘違いするほどであった。そしてスキーを再開すると、そこに存在しているのは、自分たちが風を切って滑る音、板と雪面がリズム良くこすれ合う音、そして徐々に荒くなっていく息遣いだけなのである。まさしく小原國芳先生が重要視した「スキーと対話した瞬間」でもあった。

<2016年3月25日(7日目)>

- ・スキー講習(トゥールス)
 - ・19:00 ホスピッツにて夕食会
- スキー講習最終日、天候が悪かったものの、この

日はこの地方で最も滑走距離の長いコースの半分を滑り降りたのだが、半分とは思えない長さで、改めて驚かされた。また、初日は下に降りるまでに、何度も休憩をとってもらっていたが、この日は疲れを感じることなく滑り降りることができた。このことは、指導の中で言われ続けた、スキー板の良い位置に乗ること、筋力だけで滑るのではなく、骨格で滑るのだという事がやっと理解できたように感じた。

最終日の夜は、校長や講習をしてくれたマーティン氏とホスピッツ・アルムに行き、夕食会を行った。

ここは、歴史上初の「スキークラブ・アールベルグ (SCA)」が創設された場所でもあり、由緒正しい場所である。現在は5つ星のホテルとなっている。



SCA の歴史年表

ホスピッツ・アルム
の様子



懇親会では、校長先生と今後の交流を約束し、また玉川学園への国家検定員の派遣も了承して下さった。また、今後様々な形で玉川学園から児童・生徒・学生を受け入れることが可能であるとも付け加えてくださった。

<2016年3月26日・27日(8・9日目)>

成田空港到着。9日間の研修終了。

3. スキーアカデミーの歴史と日本のスキー

今回訪問した『サンクト・クリストフ・スキーアカデミー』は、1923年にヤンナース教授が始めた『ウインターハイム・サンクト・クリストフ』から発展し、現在に至る。ドイツと国境を隔てる2000m級の山々が25kmにわたって続くノルトケッテ連邦の麓に横たわるインスブルックの街から、さらにバスで

1時間ほどのアールベルグに位置する。2006年に現在の建物に改装された。



オーストリアスキーのベースは“レース”である。1930年代のパイオニアであったハンネス・シュナイダーは、アールベルグスキー術を提唱し、当時のスキー界を風靡することとなった。

シュナイダーが日本のスキーヤーに対する助言として『第一：決して転ばぬこと。第二：優美なること。第三：できるだけ速く行うこと。』と提言した。さらに2つの忠言として『第一：基礎を根本的に習得して下さい。そしてそれが出来てからはじめて先に進んで下さい。第二：同じ斜面で同じ事を繰り返すことは止めて、なるべく各種各様の斜面で練習して下さい。それがすなわち私の日本スキーヤーに対する助言であります。』と残している。

1950年代は“国立スキー学校”という名称で、“現代オーストリアスキーの父”と言われるシュテファン・クルッケンハウザー(2代目校長)がディレクターも務めていた。クルッケンハウザーと共に、1963年に日本スキー連盟がスキー講師を招聘した際に同行していたフランツ・フルトナーもここで20年程指導をしている。1970年代になり、クルッケンハウザーの後継者・フランツ・ホピヒラー(3代目校長)、ヴェルナー・ヴェンドレ(4代目校長)も玉川学園との交流を続けてきたのである。玉川学園が世界で初めて総合スキーCD-ROM「スキーサポートシステム」をスキーアカデミーの全面協力のもと完成させ、後のスキー技術の研究やスキー教育の発展に繋がったと言える。

4. スキー場の環境と安全

スキーアカデミーのインストラクターである Sebastian Brotzner 氏からスキー場の環境と安全についての講義を受けた。日本のスキー場と比較しながらみていく。

1) ゲレンデの標識

Arlberg 地方のエリアでは、圧雪されている斜面でコース管理されているピステと、圧雪されていない斜面で滑走は自己責任となるオフピステに分かれている。標高が高いため、寒くて植物が育たない環境もみられた。そのため、コースは設定されているものの、山全体を滑ることができる環境は、日本と大きく違うと言える。オフピステと呼ばれるコース外の場所は、日本では滑走禁止とされている。オーストリアでは樹木保護目的として、進入禁止エリアで滑走した場合は、€400 の罰金をとる場所もある。

標識は、色でレベルを分け、番号でコースが分かるように設置されている。青は初級（斜度 25%）、赤は中級（斜度 40%）、黒は上級（斜度 40%）とレベルが分かれている。斜度に関してはオーストリアの道路標識と一致させるなど、初心者にも分かりやすいように工夫されている。

コースには、雪崩の危険性を示した大きな電光掲示のゲレンデマップが設置されている。日本のスキー場でも見られるようなコース案内であるが、オーストリアでは雪崩の危険性が高いことやオフピステを滑走する人が多い。そのため、気候や時間によって随時情報更新ができるように、電光掲示板が用いられている。



ゲレンデに設置してある標識

(2) 危険の種類

① スキー場の環境で考えられる危険

オーストリアの施設や環境は、規模は違うものの

日本と考えられる危険はさほど変わらない。

<施設>

リフト・ゴンドラの乗・降車場や、コース・リフトの交差点、人が集まる場所、狭いゲレンデなどが挙げられる。

<コンディション>

アイスバーンなどの雪質や、スキーとスノーボードが同じコースで滑走する場合などの危険が挙げられる。オーストリアでは、スキーとスノーボードのコース制限はなく、スノーボードが全体の 30~40% くらいの割合を占めている。日本では、安全面を考え、スキーとスノーボードを分けて滑走するコースもみられる。

<天候の面>

山の天候はすぐに変わるため、気温や風、霧などには注意が必要である。

② 指導者の留意点

オーストリアでは、資格を持っていない体育教師は引率までしか行えないという決まりがある。日本では、指導資格などを取得するシステムはないため、明確な違いがある。その指導の中での留意点としては、怪我の予防としてウォーミングアップを行うこと。生徒に無理をさせず、段階を追って進めること。状況に応じて休憩をとること。そして、指導するゲレンデの情報を確実に把握することが挙げられる。

(3) FIS(国際スキー連盟)のルール

国際安全基準として賠償問題の様な際にこのルールが適応される

- ① 他人への配慮
- ② スピードや滑り方(能力に応じて)
- ③ シュプールを選ぶ(割り込みや他人の邪魔)
- ④ 追い越し
- ⑤ レストハウス近辺での接触
- ⑥ 立ち止まり
- ⑦ 上へ登る
- ⑧ サインを守る
- ⑨ 他の人の事故(救急・人を呼ぶ・目印など)
- ⑩ ID を携帯する

日本でも FIS のルールを基として、安全管理が行われている場合が多い。オーストリアでは、ヘルメット着用については義務ではないが、今後は義務化する方向。

(4) 安全の為の留意点

安全には2つの側面があるということに留意する必要がある。オーストリアでは、日本のゲレンデ環境と違い、基本的に標高が高く、コースもたくさんあるため、気をつけなければならない点が多い。

①環境面

気温・日射し・天候・ゲレンデ状況・標高(2400m 基準)・風速・気温から出す体感温度など、滑走をする上で留意しなければならない。ただし、滑走を禁止するという措置ではなく、標高の低い所へ移動すること等で対処している。

②自己管理の面

個人のレベル・体調・体力・能力・病気・心理面(性格も含む)・経験値・道具などに留意する必要がある。

(5) 雪崩 (Lawinen kunde) について

雪の重さ、状態、地面の状況により、雪崩が発生する。雪崩の原因は、新雪が積もる(15cm でも危険とされる)・風・気温・斜面の向き(日当たり)とされている。防止方法として、防止柵(Lawinenschutz)が設けられている。30年くらいで寿命になるのでその間で植林。これらで対策している。

また、斜面から飛び出ている大きな蛇口状の管があり、爆薬を爆破させて雪を崩し、雪崩発生を防いでいるゲレンデもある。単に雪面に立つのと比較して、斜面を滑ると7倍、転ぶと10倍の負担が雪面に掛かるとされる。雪崩の危険レベル(1~5)は毎朝7時に委員会で決定し、情報を発信している。

(6) 事前の計画

天候・地形や環境やグループのメンバーの情報を把握する必要がある。ガイドの装備品としては、エアバッグ・シャベル・240cm 以上のソンド(深さを測る)・ビーコン(LVS)・救急バッグなどが必需品とされている。日本では、荷物は最小限で滑走し、インストラクターなども荷物を持っていない印象で

あった。しかし、オーストリアのスキーヤーはオフピステなどを滑ることもあり、リュックサック型のエアバックを携帯している様子が多く見られた。携行品のリストからも、雪崩に遭遇する危険性が伺える。

(7) 事故が起きた時の対応

①事故の場所を明示

衝突防止に、5m 上にスキーでX印を作る。

②連絡の際の報告

どこで、何が、人数、怪我の状態、反応等を連絡し、指示を待つ。標高が高く、ヘリコプターでの搬送が必要な場合は、着陸出来る様に整地して待つ必要がある。

5. オーストリア・スキー教程

オーストリアスキー教程は、クルッケンハウザー教授が1950年代に出版し、ホッピヒラー教授へと引き継がれ、その後も1972年、1975年、1982年、1996年、2007年と改訂されている。そして、現在の教程は2015年に改訂されたものである。内容として根幹の部分が大きく変更されたわけではなく、三つのカテゴリーに分けられていたものを、より分かりやすくするために四つにし、色分けを行っている。今回の改訂の理由として六つのことがあげられる。

①動きに関する知識の変化

②競技スキー(レース)

③道具に依存の部分が大きくなってきた

④流行の影響(スノーボード、オフピステ)

⑤顧客のニーズ

⑥スノースポーツの多様化(パーク、ニュースクール、急斜面など)

なかでも、スキーをとりまく環境が変わってきていることが改訂の理由として大きい。スキー用具の大きな進歩は今まで難しいと言われていた技術の習得を早め、多くの人がスキーを楽しめるようになった。また、急斜面やバックカントリー、ニュースクールなど、今まで一部の人がしか楽しむことができなかったものも、用具の進歩により多くの人を楽しめるようになってきている。このようにスキーのニーズは

以前と比べ多様化してきている。そのため、オーストリアスキー教程も時代とともに少しずつ変化してきているのである。

基礎を学ぶ

道具に慣れる

プルーク

基礎を活用する

プルークで方向付け

プルークで回る

発展・改善する(スピードや斜度)

パラレル

カーブの大小の差

ダイナミックなパラレル

スピード

完成させる

カービング

スピード

フリースキー

パーク

6. 今後の展望

(1) 現在のスキー学校 (2016 年度現在)

①時期：1月5日～1月9日 (4泊5日)

対象：4・5年生

場所：志賀高原ホテルー乃瀬

指導：4年生→教員

5年生→有資格者プロコーチ

内容：4年生：スキーに親しむ。

日常の延長としてのスキー

5年生：よりスキーに特化した指導

②時期：2月3日～2月7日 (4泊5日)

対象：7年生

場所：志賀高原ホテルー乃瀬

指導：7年生→有資格者プロコーチ

内容：7年生：より専門性の高い指導

国際基準を用いての検定の導入

③時期：2月 (4泊5日)

対象：大学生

(体育専攻に対して・コア2の授業として)

場所：志賀高原ホテルー乃瀬

指導：大学教員

内容：大学教員による技術指導

スキー指導法の指導 (体育専攻生対象)

現在、玉川学園玉川大学の卒業生でもある志賀高原ホテルー乃瀬を中心に玉川スキー教育が行われている。4年生からスキー教育をはじめ、現在は大学まで系統立てて指導が行われている。より一層玉川のスキー教育が発展していくためにも、下記のことに関して更に熟考していく必要がある。

(2) 今後のスキー学校

2020年のK-12変革に伴い、様々な行事も見直される。その際にスキー学校がなくされてしまうのではなく、より充実を図っていききたい。

K-12学年構成の変更に伴い、中学と高校が一貫となる。そのように考えたときにスキー指導をどの学年対象に行うか、また学年ごとで行うことがベストなやり方なのかも含めて検討する必要がある。

低学年の中で4・5年生が連続して実施することは考えにくい。また4年生は林間学校とスキー学校と1年間で2つの行事を抱え、教員の負担も大変大きくなっている。3年生が現在9月に林間学校を行っているが、それをスキー学校に変更することを提案したい。そうすることで林間学校は、4年6年となり、スキー学校は3年5年7年とそれぞれ1年おきに実施可能となる。その際3年生のスキー学校に関して、年齢に応じた泊数を検討する必要がある。

① 高学年でのスキー学校実施

現在、高学年でスキー学校は実施されていない。K-16の繋がりを考えたときに、高学年のスキー学校実施は必須条件となる。

高学年に上がるにつれて、団体の宿泊行事から、グループ・個人へととなっている。しかし、中学年代

最後の9年生(中学3年生)での実施も大いに教育的価値はあると思う。また12年生の大学推薦をもらった生徒で、卒業前にスキー学校を実施するのも有効である。特に体育免許取得希望者へのスキー学校は特に必要不可欠であると考え。またアフリカンスタディーズやヨーロッパスタディーズに並んで、玉川体育における大切な場所(オレロップ体育アカデミー・ブンドス・スキーアカデミー)を巡る、教育的価値の高い自校教育を交えた研修が良いと考える。

これらのことを導入することで、伝統を大切にしながらも、進みつつあるスキー教育になると考える。

② スキー指導者の問題

スキー講習における指導者の問題も検討すべきである。年齢に応じた柔軟な考えが必要ではあるが、スキー学校のより充実を図るには、やはりプロコーチの積極的な導入も視野に入れるべきである。

現在5年7年のスキー学校では有資格者の方にスキーを指導していただいている。スキーの専門的な知識は勿論のこと、そのスキー場のことを良く知っている指導者に習うことは、様々なリスクを回避することに繋がる。その一方で、普段から慣れ親しんだ玉川の教員に指導してもらうことは、双方にとってメリットが大きい。授業以外の新たな教師との関わりは、生徒に大きな刺激を与えてくれ、専門外の内容を指導するために学ぶことは、教師にとっても大きな財産となる。双方のメリット、デメリットを天秤をかけながら検討していく必要がある。しかし、理想はあるが、現実的には、教師の年齢層が上がっていることや、日本全体のスキー人口が減っていることもあり、今後玉川の教員に関しても、スキー経験者の人数がどんどん減っていくことが予想される。そういった中で研修を重ねるだけでは解決できないことが増えているのも見越して考えなくてはならない。

③ オーストリアスキー国家検定員の招聘

2016年にオーストリア研修を実施し、その後は特に関係作りは行えていない。早い時期に一度招聘し永続的な関係作りをすべきである。国家検定員を

呼ぶ時期、どのスキー学校に帯同してもらうか、またその予算組を前年度には始めなくてはならないなど、課題は山積みである。

④ スキーサポートシステムのリニューアル

スキー用具の発展・スノースポーツの広がり考えたときに、時代に合った方法で、現状に即したものに変更すべきではないかと考える。

1999年に完成したCD-Rも時代の変化、用具の変化に伴い、リニューアルが必要ではないかと考える。内容も含め、使用する媒体も考えなくてはならない。

⑤ 玉川のスキーの歴史を映像化する

今後も永続的に続けるであろうスキー学校の際に、自校教育という意味で、映像を作成したい。その際、どのような内容にすべきかについて、考えなくてはならない。また、撮影は玉川学園のPRビデオを作成している業者をお願いするのも一つの手である。

⑥ スキー研修について

スキー研修の時期や場所、内容に関してもより良いものにしていきたい。

現在のスキー研修は、玉川の古くからの先輩のホテルを使わせていただき、何一つ不自由のない充実した研修ができています。また杉山スクールも毎回校長自ら指導に当たっていただき、オーストリアスキーという共通の哲学を持っているスクールとの繋がりは、今後も大切にしていきたいところである。しかしここ数年、12月の末は雪不足が深刻で、中止を考えざるおえないことも、今後発生しそうです。研修は、スキー学校前に行くべきであるのは間違いない。時期を更に遅らせることは考えにくいいため、やはり場所の変更も今後検討していかなくてはならない。

<参考文献・資料>

- ・「全人教育」昭和38年2月ナンバー162
- ・「全人教育」昭和37年11月ナンバー159
- ・「学園日記」昭和5年ナンバー8,9
- ・「玉川通信」ナンバー121
- ・「全人教育」昭和46年3月ナンバー259
- ・「全人教育」昭和37年12月ナンバー160
- ・「全人教育」昭和37年10月ナンバー158
- ・「新聞：東奥日報」
昭和5年3月26日「雪の英雄シュナイダー」
昭和5年3月23日「シュナイダーが大鱈スロー
プで妙技見せる」
昭和5年3月29日「世界のスキー王シュナイダ
ー氏きのふ弘前に来る」「けふ実演後青森通過」
昭和5年28日「シュナイダー氏けふ弘前へ」
昭和5年30日「北欧とは反対の私のスキー術
「シュナイダー氏の美技に」
昭和5年31日「シュナイダーのエピソード」
昭和5年4月6日「播いた種は実を結ぶ」
- ・「ハンネス・シュナイダー氏 来日の記録」スケ
ジュール
- ・長岡忠一「日本スキー事始め」,ベースボールマ
ガジン社,1989
- ・「皇族のひとりごと」昭和52年1月24日著 寛
仁親王殿下
- ・「日本スキー発達に関する一考察（I）—その渡
来と発祥について—」
1984年度玉川大学文学部紀要「論業」第25号
著 酒井繁
- ・「親愛なる日本のスキーファンに告ぐ」3月17
日中央放送局で語った内容
- ・「小原國芳がハンネス・シュナイダーを日本に招
聘した経緯に関する史的考察」
1995年日本スキー学会で発表したもの
- ・「ハンネス・シュナイダー生誕100年・来日6
0年記念祭報告書」
ハンネス・シュナイダー生誕100年・来日60年
記念祭組織委員会作成
- ・小原國芳選集3「全人教育論・思想問題と教育」
昭和55年10月10日著：小原國芳
発行人：小原哲郎 玉川大学出版部

- ・「玉川教育—1963年版—」昭和38年11月
1日 玉川大学出版部
- ・VISAグループ『VISA』美しきアルプスの休日・緑
萌ゆチロリアン・リゾート,2015
- ・日本職業スキー教師協会(SIA),監修(ニホンショク
ギョウスキーキョウシキョウカイ),『最新オーストリ
アスキー教程 日本語版 スキー・キッズスキー・スノ
ーボード完全上達』,実業之日本社,2007